

批判と内省：ランボーにおけるキリスト教批判

原田，亮
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/1959213>

出版情報：地球社会統合科学研究. 9, pp.81-89, 2018-09-25. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

批判と内省

—ランボーにおけるキリスト教批判—

ハラ ダ
原 田
リョウ
亮

はじめに

フランスの詩人アルチュール・ランボー（1854-1891）の作品において、キリスト教が作品構成上、重要な意味を担っていることは広く知られている。それは実際、『地獄の一季節』や『イリュミナシオン』の「精霊」において、破壊の書き換えの対象として、作品構成上の本質的要素の一つをなしている。しかし、それが具体的にどのような類型のもとに現れているのかについては、意外なほど言及がなされていない。そして、まさにその点に関して、阿部良雄は、湯浅博雄と中地義和を合わせた三名で行われた座談会において興味深い指摘をしている。

阿部 ランボーのキリスト教にはどうも二つのレベルがあって、一つは慈愛とか傲慢オールドアイユのような理念が媒介としてとらえられている信仰としてのキリスト教で、もう一つは制度としてのカトリシズムが物質的相をとって現れているもので、先ほどの不透明性に通じるものでしょうか。ボードレールの場合、そういうような意味でのオパシテとしてのカトリシズムというのではないように思われます。ボードレールの場合ほとんど神話体系ミトロジーになっているわけだから、神=悪と捉えるにしても、「聖ペトロの否認」とランボーの「悪」とでは、全然レベルが違ってきますね。「聖ペトロの否認」の方は「……」神話的な神ですけども、ランボーの場合は最後に「おひねり」か何かを集めるような神様ですからね¹⁾。

ここでの阿部の指摘は、座談会での発言である以上、断片的なものにすぎない。だが、ランボーにおけるキリスト教のテーマの現れ方という複雑な事象を的確に捉えているように思われる。ところで、ランボーにおけるキリスト教の現れ方には、もう一つの特徴がある。それは、キリスト教がつねに批判の対象として現れるということである。そこから、この阿部の指摘を拡張して、次のようなことが言えるのではないだろうか。すなわち、ランボーにおけるキリスト教批判には、理念的批判と制度的

批判の二つのレベルがあると。本論の第一の課題は、特にランボーの初期韻文詩を例にこの二つのレベルの批判が、具体的に確認できることを論証することにある。

だが、ランボーにおけるキリスト教とその批判というテーマへのアプローチは、本当にそれだけで十分なのだろうか。ここで先ほどの阿部の発言に立ち戻ると、そこでもう一つの論点が提出されていることに気が付く。つまり、不透明性（オパシテ）の問題である。阿部が、ここで不透明性の具体例をどのように考えていたのかは明瞭ではない。しかし、この不透明性の問題を以下のようなものと想定することは可能ではないだろうか。つまり、ランボーにおけるキリスト教の現れ方は、単なる類型的表現ではなく、詩の話者の問題が深く関わっていると。本論の第二の課題は、この不透明性の問題を、特に「酔いしれた船」を例として、詩の話者との関連から検証することにある。

このような二つの課題を持つ本論の問題意識の根底にあるのは、ランボーにおける詩の話者、特に『地獄の一季節』に顕著な、極度の内省を含む自己分裂的な語りは、いったいどのように準備されてきたのかという疑問である。この疑問は、『地獄の一季節』が自己断罪的なテキストとして、ランボーの作品の中でも、特異な位置を占めるがゆえ、容易な問いではないが、ランボーにおいてキリスト教批判というテーマがどのような変遷をたどってきたかを考えることが、当の問題の考察の一つの手がかりになるのではないか。本論の出発点にあるのは、そのような直観と期待である。

制度的批判

ランボーにおけるキリスト教批判を考察するにあたって、まずは初期韻文詩の「悪」Le Malを例として制度的批判を検討してみよう。

「悪」は1870年に執筆されたと推察されており、現行の多くの版で初期韻文詩、あるいは単に『ポエジー』（『詩集』）*Poésies*とまとめられる1870年から1871年にかけて書かれた一群の詩篇の一つである。その中でも、「悪」

は同年10月にランボーが友人ドラエーに託した二二篇の詩を清書したドゥエ詩帖に収められた詩篇であり、ランボーの最初期の作品の一つとして知られる。そして、この「悪」という詩が、キリスト教批判をライトモチーフとしていることは一読して明らかであり、ランボーの諧謔精神の顕著な例として、しばしば取り上げられる。

「悪」は、全体が四節一四行で構成されるソネ形式の短詩だが、第一節、第二節で描写されるのは、陰惨な戦争の光景である。

散弾の真赤な痰が一日じゅう
果てしない青空でひゅうひゅう音をたてるのに、
緋色や緑の軍服の部隊は、自分たちを嘲笑う〈王〉の
かたわらで、
群をなして砲火のなかにくずおれていくのに、

恐るべき狂気が、幾十万の人々を
おしつぶし、煙をあげる一つの山と化していくのに、
——夏のさなか、草に抱かれ、おまえの歓喜のなかで、
死にゆく哀れな者たち！
自然よ！ かつてお前はこの人々を清らかに創り上げた
のに！…²⁾

描かれる情景は陰惨さを強調するためだろう、わずかに隠喩を用いながらも、直接的で露骨である。「自然」の生命力が充溢する「夏のさなか」、「真赤な痰」のような砲弾が、「青空」を赤と青に埋め尽くす。悲惨な戦争の中、一人余裕を保つ「〈王〉」のせせら笑いの中で、「緋色」の軍服を着たフランス兵と「緑の軍服」のプロシア兵という「幾十万の人々」が、「煙をあげる一つの山と化していく」。このように普仏戦争の情景が鮮やかな色彩を背景に描かれていく。

だが、問題となるのは、続く第三節と第四節であり、普仏戦争の光景から場面は一転する。

——〈神様〉がいて、ダマスク織の祭壇布や
お香や、黄金の聖盃ににっこり笑みを浮かべ、
ホサナの歌声にあやされて眠りこみ、

それから、眼を覚ますのだ、母親たちが、不安のうちに
うずくまり、古びた黒い帽子のかげで涙を流しながら、
ハンカチでくるんだ大きな銅貨を差し出すときに！³⁾

ここで示されているのが、きわめて露骨な反教権主義、すなわちキリスト教批判であることは誰もが即座に認め

るだろう。教会は外部の生と死の交錯する、息詰まるような気配に対して、「ダマスク織の祭壇布や／お香や、黄金の聖盃」たちの物質的で無機的な気配で満たされている。そして、普仏戦争の惨禍が続くなか、外と隔絶した人工的で、能天気な静けさに包まれる教会では「〈神様〉」が赤子のように眠りこける。そこに戦争によって息子の命が奪われるのではないかという「不安」に満たされた「母親たちが」、なけなしの「銅貨」をお供えにくる。外部の喧騒に対しては、全くの無反応であった「〈神様〉」はその「銅貨」にだけは反応し、始めて「目を覚ます」。ここで描写されているのは、そのような情景であり、その骨子となっているのは、おさめるべき戦争をだしに母親たちからのお供えを集める教会と「〈神様〉」、すなわち制度としてのカトリシズムを徹底的に物質的相で捉える描写のあり方に他ならない。そこでは、「〈神様〉」は眠りこけ、現実の戦争に対しては何もなすところはなく、ただ金策にのみ走っているのである。したがって、この詩は制度としてのキリスト教を物質的に捉えるランボーのキリスト教批判の典型的な例となっている。

だが、この詩がそのような批判精神に貫かれているとしても、批判の核心となるメッセージはなんなのだろうか。タイトルの示す「悪」とは、膨大な数の命を奪う戦争を指すのか、あるいは戦争という悲惨を放置し、金銭にしか興味を示さない宗教の偽りにあるのか、各論者の解釈は一様ではない⁴⁾。

ところで、「悪」が戦争を指すのか、怠慢な神を指すのか、どちらと取るにせよこの詩が現実の悲惨に対してなにもなすところのないキリスト教の欺瞞を告発している点には異論のないところであろうと思われる。カトリシズムは、戦争の悲惨にせよ、息子を失うかもしれない母親の「不安」にせよ、現在の問題になんの働きかけの力も持ちえない。したがって、キリスト教批判という視点に焦点を絞れば、この詩の批判の核心の一つは、神の無力さ、すなわちキリスト教の無力さへの批判となるのである。

このようにキリスト教を物質相での描写から捉えることで、その無力さを批判することが、初期韻文詩にみられるランボーのキリスト教に対する制度的批判のあり方なのである。では次に、こういった批判の姿勢は、理念的批判ではどのように現れているのだろうか。

理念的批判

理念的批判の例として、ここでは初期韻文詩の中から、「慈愛の修道女たち」« Les Sœurs de charité » を取り上げたい。

「慈愛の修道女たち」は先ほどの「悪」と同様に、現行の多くの版で初期韻文詩にまとめられる詩篇の一つである。一方で、ランボーの自筆原稿が発見されておらずヴェルレーヌによる筆写原稿のみが伝わっている点、またランボーの詩作に大きな転機をもたらしている「見者の手紙」(1871年5月13日、および15日の日付を持つ二通の書簡)の前後に書かれたと推測されている点(「慈愛の修道女たち」の原稿には1871年6月の日付がある。また1871年4月17日付のポール・ドメニー宛書簡に、ほぼ同一の« la sœur de charité »⁵⁾ という語が用いられていることから、「慈愛の修道女たち」は、この時期にはすでに執筆されていたと考える向きもある⁶⁾)など、「悪」とはテキストの位相に若干のズレがあるものの、ランボーにおけるキリスト教の理念的批判の好例となっている。

そのような来歴を持つ「慈愛の修道女たち」であるが、まず注目したいのはそのタイトル« Les Sœurs de charité »である。「les sœurs de charité」とは、リトレ仏語辞典にも記載されているように、貧民や病人の看護に従事する修道女を指す慣用的用法であるが、「sœur」は単体で「修道女」を、そして« charité »も単体で、キリスト教の三神徳の「愛徳」、特に「隣人愛」を指す言葉である(リトレ仏語辞典の第一義もこの「隣人愛」⁷⁾)。そして、「charité」という語はランボーの作品において頻出する重要語彙の一つであることから、ここでの使用は慣用的用法を超えた、意図的選択であると考えられる。そうした極めてキリスト教的含意を感じさせる表題のもと始まるこの詩の冒頭は、しかし、いささか突飛な印象を読者に抱かせる。

その若者の瞳はかがやき、肌は栗色、
裸でいるのがふさわしい二十歳の美しい肉体、
額には銅の輪をめぐらせ、ペルシャなら
月下で未知の〈精霊〉に熱愛されたことだろう、

血気盛んでありながら、初々しく暗いやさしさをもち、
自分本来のかたくなさを誇るその様は
ダイヤモンドの岩床の上をころがる
夏の夜のなみだ、生新な海にも似通う若者⁸⁾。

描かれるのは心身ともに精気あふれる「若者」である⁹⁾。「瞳はかがやき、肌は栗色」、「裸で」いることこそが似つかわしい健康的な美しさを誇る「二十歳」の「若者」は、同時に「初々しく」「血気盛ん」な気性の持ち主であり、宝石のもつかがやきと堅固さという基盤の上に、それと反するような「夏の夜のなみだ」や「生新な海」のよう

なほの暗さときらめき、そして滑らかさを持つ、そのような「若者」が描写される¹⁰⁾。「慈愛の修道女たち」というタイトルを持つ詩は、まずこのような「若者」の力強い描写から始まる点で、性別に関してタイトルが予期させるものとの間に乖離性を持つ。

だが、より重要なのはもう一つの乖離性、すなわち、キリスト教的含意のタイトルに対しての異教的内容であり、それらには一つには明示的描写に、二つ目には語彙に現れている。まず、明示的描写としての異教的属性は「若者」の描写に見て取れる。「慈愛の修道女たち」の主人公たる「若者」の「肌は栗色」であり、「額には銅の輪」をつけているとあるが、これらは明確にオリエントを連想させる描写である¹¹⁾。そして、「ペルシャ」と「〈精霊〉»« Génie »という語彙はそのことを確定させる。なぜなら、「ペルシャ」は明確に地理上のオリエントを、そして「〈精霊〉»« Génie »は、三位一体の「精霊」を指す一方、『千夜一夜物語』に現れるような異国的「精霊」というオリエント的表象としての意味を持つからである。つまり、この「若者」は、詩のタイトルが予期させるキリスト教的表象とは位相が異なる異教的存在として描写されていることが分かるのである¹²⁾。

では、そのような文脈を踏まえ、詩はどのように展開するのだろうか。このような華々しい「若者」の属性から考えれば、「慈愛の修道女たち」は予想外に悲劇的な方向へと進んでいくこととなる。まず第三節で話者が描写するのは「若者」がとらわれている「この世の醜悪さを前にして、／激しく苛立つ心」という深い失望である。そして、「若者」は、その失望による「永遠の深い傷を満身にうけ」ながら、傷を癒すために「自分の慈愛の修道女を求めはじめる」こととなる。だが、そのような「若者」の望みが、さらに深い失望に終わるであろうことを、第四節から第六節の話者による独白が明らかとする。

だが、おお〈女〉よ、臍物の堆積、甘く憐れなものよ
きみは断じて慈愛の修道女ではない、断じて、
[……]

大きな瞳をもちながら目覚めることのない盲人よ
ぼくたちの抱擁もすべて一つの疑問にすぎない、
[……]

きみの憎しみ、固定された麻痺、衰弱
そして かつて身に蒙った数々の暴力
そのすべてを きみはぼくたちに返す、おお しかも
悪意なき〈夜〉よ、
月毎にまき散らされる過剰な血のように¹³⁾

話者がとらわれている失望は明確である。すなわち、「この世の醜悪さを前にして」の失望を癒してくれること、「慈愛の修道女」となることが本来期待される「〈女〉」が、その実、話者を含む「若者」たち（独白中の代名詞は「ぼくたち」）の失望を決して癒してくれることはなく、逆に「〈女〉」に与えられてきた「数々の暴力」の復讐をなすというのである。

だが、このような「慈愛の修道女」をめぐる深い失望の原因はなんなのだろうか。続く第七節と第八節は、その点を考えるうえで重要な鍵を与えている。

—— 一瞬身をまかせた女が若者を慄然とさせるとき、
愛、つまり生命の呼声と行動の歌
緑の〈詩の女神〉と熱烈な〈正義の女神〉が来て
そのおごそかな妄執で若者を苦しめる。

ああ！ 絶えず輝きと安らぎに渴いていて、
容赦のない二人の〈修道女〉には見捨てられ、
その腕の中で養ってくれる学問に愛情をもって嘆きをもらし、
若者は花咲く自然に血をしたたらせるその額を差し出す。

- Quand la femme, portée un instant, l'épouvante,
Amour, appel de vie et chanson d'action
Viennent la Muse verte et la Justice ardente
Le déchirer de leur auguste obsession.

Ah ! sans cesse altéré des splendeurs et des calmes,
Délaisé des deux Sœurs implacables, geignant
Avec tendresse après la science aux bras almes
Il porte à la nature en fleur son front saignant.¹⁴⁾

まず描かれているのは、話者のかねての懸念通り、「若者」に「身をまかせた女」が、「若者」をおびやかすことである。そして、その瞬間「愛、つまり生命の呼声と行動の歌／緑の〈詩の女神〉と熱烈な〈正義の女神〉が来て／そのおごそかな妄執で若者を苦しめる」。この二人の女神が何を示しているかについては諸説あり、例えばアントワヌ・アダンは「緑の〈詩の女神〉」を詩的靈感を与えるアプサン酒の象徴、そして「〈正義の女神〉」を革命の象徴と捉える。一方、シュザンヌ・ベルナルは「緑の〈詩の女神〉」を第八節の「自然」の、「〈正義の女神〉」をブルードンのアナーキズムの象徴と捉え、ピエール・ブリュネルは、「〈正義の女神〉」に関しては

ベルナルと同じ立場にたちながらも、「緑の〈詩の女神〉」は希望の謂いだと取るというように見解の一致をみない¹⁵⁾。しかし、ここではこの二人の「女神」が何を指すのかについて深入りはせず、それよりも重要と思われる、これらの語の同格関係を検討したい。

この節の解釈が分かれることとなる一因は構文上の混乱であり、読者を惑わせるのは、「女」、「愛」、「生命の呼声と行動の唄」、そして「緑の〈詩の女神〉と熱烈な〈正義の女神〉」という四語のつながりが不鮮明なことである。それは具体的にはそれぞれの同格関係が不鮮明なことであり、特に焦点となってきたのは、「愛、つまり生命の呼声と行動の唄」が、「女」と同格なのか、あるいは二人の「女神」と同格なのかということとなる。ベルナルのように、この個所を「女」と同格であると取れば、詩篇の全体に現れている女性への失望という文脈から、「生命の呼声と行動の歌」とは、生命も行動も生み出し得ない現実の「女」への嘲りであるとネガティブに解釈され¹⁶⁾、当の一節の意味は以下のようなものとなる。すなわち、「愛、つまり生命の呼声と行動の歌」でしかない「女」が、「若者」に「身をまかせ」彼を「慄然とさせるとき」、その対蹠的存在としての「緑の〈詩の女神〉」（「自然」）と「〈正義の女神〉」（「アナーキズム」）を求める「妄執」が、「若者」を「苦しめ」ることとなる、と。反対に、ブリュネルやアダンのように当の個所を「女神」と同格であると取れば、希望や詩、そして革命を象徴する二人の「女神」を修飾するポジティブな表現だと解釈される（詩の展開上、それが最終的に実現しないものだとしても）。そして、当の一節の意味は以下のようなになる。すなわち、「女」が、「若者」に「身をまかせ」彼を「慄然とさせるとき」、「愛、つまり生命の呼声と行動の歌」である、実現されるべきだがなされない「緑の〈詩の女神〉」（希望や詩）と「〈正義の女神〉」（革命）の「妄執」が、「若者」を「苦しめ」こととなる、と。これらの解釈には、それぞれに一理がある。

だが、このどちらの解釈にも不満が残らざるをえないだろう。なぜなら、ベルナルのように解釈すれば、なぜそのように嘲りの対象となる「女」に、「慈愛」の役割が期待されているのか理解できず、ブリュネルやアダンのように解釈した場合、いかにも革命や希望という観念と一致する「この世の醜悪さ」を前にして「苛立つ」「若者」と、二人の「女神」の突然の衝突がうまく理解できないからである。

そして、それらの不満は、これらの解釈の暗黙裡の前提に起因していると思われる。つまり、「女」と二人の「女神」は同格関係がなく、別の存在であるという前提である。だが、本当にそうだろうか。むしろ、真に同格関係

にあるのは「女」と二人の「女神」なのではないか。つまり、この一節の同格関係は、まず「女」と「愛、つまり生命の呼声と行動の歌」の同格、次に「愛、つまり生命の呼声と行動の歌」と「緑の〈詩の女神〉と熱烈な〈正義の女神〉」の同格と二重になっており、つまるところ「女」と二人の「女神」が同格で結ばれているのではないだろうか。そのように考えた場合、当の一節を散文化すれば以下のようになるだろう。すなわち、「女」が「若者」に「身をまかせ」、彼を「慄然とさせるとき」、「愛、つまり生命の呼声と行動の歌」としての「女」が、「緑の〈詩の女神〉」と「熱烈な〈正義の女神〉」の姿となって、その妄執で、彼をひきさきにやってくる、と¹⁷⁾。そのような文脈に立ったとき、ペルナルやアダンの解釈では、第七節の中心テーマが二人の「女神」にあったのに対して、実際の中心テーマは「若者」を「慄然とさせる」「女」ということになり、第七節の内容は、「慈愛の修道女たち」となりえない「女」、つまり、「慈愛」に高まり得ない「女」の「愛」ということになるのである¹⁸⁾。

そして、この第七節以降、一篇の詩としての「慈愛の修道女たち」は、「若者」がいかなる慰めも得られないまま、最後の頼みの綱として、死という修道女を呼び求めるという悲劇的結末で幕を閉じる（「おお神秘なる〈死〉、おお慈愛の修道女よ！¹⁹⁾」）。

では、なぜ「愛」は「慈愛」に高まり得ないのだろうか。ここで立ち戻りたいのが、キリスト教的含意を強く感じさせるタイトルに対して、異国趣味的趣向を凝らし乖離性を示していた第一節の一文である。すなわち、「ペルシャなら／月下で未知の〈精霊〉に熱愛されたことだろう」という仮定であるが、「ペルシャなら」「熱愛された」ということは、端的に詩の舞台が「ペルシャ」ではないということを示している。そして「ペルシャ」でなら「女神」と同様に超自然的な表象である「〈精霊〉」に愛されることができるということは、「ペルシャ」ではない詩の舞台では「若者」は「熱愛される」ことがないということを示している。では、詩の舞台はどこなのだろうか。それは、タイトルの属性が示すようにキリスト教文化圏に他ならないだろう。つまり、この詩はキリスト教文化圏における「慈愛」の不成立を、翻って、「慈愛」というキリスト教の中心理念である三神徳を媒介にキリスト教の不毛さ、美しい「若者」を退廃させる無力さを批判していると考えられ、キリスト教はキリスト教であるがゆえに「慈愛」をなし得ないとでもいう循環論法的批判を行っているのである²⁰⁾。

したがって、理念的批判でも、制度的批判と同様に最終的には、キリスト教の無力が批判されていることが分かる。

内省への傾き

これまで初期韻文詩におけるランボーのキリスト教批判の二つのパターンを確認してきた。一つ目は、制度的批判であり、そのままでは知覚不可能な制度としてのカトリシズムを物質的相に移し替えることで、その虚偽性を告発するというものであった。二つ目は、理念的批判であり、キリスト教の中心概念を媒介に、アレゴリー化を駆使した非常に抽象的な詩的表現による、同じくその虚偽性の根本的否定であった。

では、これら二つのキリスト教批判の共通性としてあげられることはなんだろうか。第一に挙げられるのは、その無力さ、あるいは不毛さの告発であろう。例えば「悪」における批判は、現実の悲惨に対して何もしない宗教の無力さ、不毛さが告発されていた。そして、「慈愛の修道女たち」では、抽象的展開に終始するがゆえに説得的ではないものの、「慈愛」というキリスト教の中心概念が、美しい「若者」を追い詰め、「死」に向かわせるだけであるという無力さ、不毛さが語られていた。そして、もう一つの特徴として挙げられるのが、批判の外部性である。上記二つの批判では、どちらもカトリシズムを話者自身の問題として描出するのではなく、基本的には話者の外部の問題として描いている（「慈愛の修道女たち」では、話者自身への言及が認められるものの、話者と詩の主体である「若者」の間には、主体と客体として、いまだ大きな隔りがある）。このうち、一つ目の特徴は初期韻文詩以降も、ランボーのキリスト教批判の根底をなすことになるが、次にその端緒を見ていくように、二つ目の特徴は初期韻文詩以降、話者と詩の主体の同一化を軸に、また別の様態をとることとなる。最後に、このような二つの特徴を踏まえながら、批判が外部的なものにとどまり、それが詩の主体の問題であっても、話者自身の問題ではないと捉えられていた初期韻文詩におけるキリスト教批判の様態から、批判が話者自身の内面に関する問題、つまり内省の問題へと変化していく、その変容の端緒を「酔いしれた船」≪ Le Bateau ivre ≫ に確認してみよう。

「酔いしれた船」はランボーの詩の中でも特に有名な一篇である。執筆されたのは1871年の夏から秋であり、ヴェルレーヌと呼ばれパリへと出立するにあたって、おそらくは初期韻文詩の集大成として執筆された作品である。ランボーの直筆原稿は残存しておらず、今日われわれが知ることができるのはヴェルレーヌによる筆写原稿のみである。

そのような自作の一つの総括をなす詩篇であるが、こ

れまで一貫して強い関心の対象であったキリスト教批判は、一転、なりを潜めている。その点で、前二篇における明快なキリスト教批判からの態度の変化がうかがえる。それは「酔いしれた船」以降の後期韻文詩でも同様で、キリスト教的表象が表立って詩の中心テーマを形成することは少ない。そうした中であって、この詩には明確にキリスト教的表象であると判断される個所がわずかながら存在する。

詩全体は、一艘の「船」を話者であり詩の主体とするユニークな構造を持ち、「船」の冒険の始まりと破綻を描いている。まず「船」は「悠然たる大河を流れ下るとき²¹⁾」、「叫びをあげる〈赤肌〉たち²²⁾」(インディアン)によって、自身の「船曳人夫たち²³⁾」が皆殺しにされるという出来事にあう。そこから、人間の論理の世界(陸の世界)を離れた「船」の冒険が始まるが、「船」は、「荒れ狂う潮騒のなかを[……]子供の脳髓よりもかたくなに²⁴⁾」駆け回る。そうして、「〈海の詩〉²⁵⁾」と名指される特異な感覚世界に身を浸しながら、数々の驚異的な光景を見て取っていく²⁶⁾。引用はそのような冒険の過熱のさなかの第一一節である。

ぼくは追いかけた、幾月となく、ヒステリーの牛の群れさながら、
暗礁に襲いかかる大波のあとを、
マリアたちの輝く御足が 息せき切らず〈大海〉の鼻面を
ねじ伏せられるなどとは思いません！

J'ai suivi, des mois pleins, pareille aux vacheries
Hystériques, la houle à l'assaut des récifs,
Sans songer que les pieds lumineux des Maries
Pussent forcer le mufler aux Océans poussifs !²⁷⁾

本論の問題にとって注目すべき点となるのは当然ながら、「マリアたちの輝く御足」というイメージである。当のイメージは、多くの注釈者が指摘するように、カマルグ地方に伝わる嵐を鎮める三人のマリアの伝承に従っていると考えられ、このイメージが、キリスト教的文脈に属するであろうとまず推測される点には特に異論はないであろうと思われる。だが、正確な解釈となると未だ十分に説得的な説明はなされていないのが現状であり、キリスト教的文脈を離れた読みも十分成り立ちうるであろうが、ここでは当のイメージをキリスト教的文脈に属するものと捉えたい。

そして、そのように考えた場合、当の一節の内容はブリュネルが指摘する通りであろう。すなわち、「船」が

付き従う「波の力を超える、いわゆる超自然的力の否定」であり、いかなる「超自然的力」(宗教的力)も決して、「船」を立ち止まらせることはできず、また「一瞬たりともそれを気にかけない」という話者=「船」の態度、精神状態の表現である²⁸⁾、と。そのような二つの力の対立関係は、詩の形態的側面からも強調されており、原文の第一行と第三行の« vacheries »と« Maries »は韻によるペアを構成する。またイメージのレベルでも、「ヒステリーの牛の群れ」(直訳では「ヒステリックな牛舎」、ここでは牛の群れを指すと思われる)が、「牛の群れ」から多数性、色彩の暗さ、そして下から上へという上下の運動の観念を含むのに対し、「マリアたちの輝く御足」は、多数性は同様だが、色彩の明るさ、そして上から下へという上下の観念を含むというようにペアを構成している。したがって、「マリアたちの輝く御足」を、無批判にキリスト教的イメージと捉えること自体には一定の留保があるものの、そのように捉えた場合、この節は、話者の蒙っている「波の力」が与える冒険のエネルギーの甚大さと、翻って、それを押さえつけることなど思いもよらない、キリスト教的力の無力さが描かれていると考えられる。

だが、ここで一つの疑問がわく。では、この一節がこれまでと同様にキリスト教の無力さを描いているとするのならば、これは制度的批判と理念的批判のどちらに属すると考えられるのか、と。まず制度的批判はどうだろうか。ここでは確かに「マリアたち」が「足」という物質的相で捉えられている。だが、それがキリスト教の制度的問題につながるのか。到底つながりそうにない。あえてつなげようとするならば、それは牽強附会之感を認めないだろう。一方、理念的批判も同様である。「マリアたち」自体は確かにキリスト教的イメージだが、これが何らかの理念を媒介しているようには思われぬ。確かに、聖母マリア自体は、キリスト教において重要な信仰の一つであるが、それはそれ自体が一つの信仰であり、理念ではない点で、表象に属しているといえるだろう。したがって、この一節には初期韻文詩における二つのキリスト教批判には収まりきらない要素があるのである。

そして、この一節が前述の二つの批判の類型に収まらないのならば、それはなぜなのか。その点を考察するにあたって、立ち戻りたいのが「酔いしれた船」と前出の初期韻文詩二篇の構造上の重要な違いであり、話者と詩の主体の関係性である。まず初期二篇では話者と詩の主体の関係は主体と客体という二分法が明確であった。「悪」では、詩の主体は、兵士、「〈神様〉」、「母親たち」と複数にわたるものの、それぞれの属性は明確であり、詩の主体たちは、詩の外部の文脈から意味づけられてい

る。そうした中であって、主体たちを取り囲む物質的描写の意味、すなわちカトリシズム批判という詩のメッセージも明瞭であった。「慈愛の修道女たち」では、話者と詩の主体は、部分的に重なりを見せるものの、やはりその懸隔も明らかだ。そして、「悪」と同様に、詩の主体としての「若者」は、詩の外部の文脈で意味づけられており、「慈愛」や「愛」をめぐる詩の意味はある程度特定可能であった。このように、意味づけが明瞭である詩の主体に対し、話者が外部的に言及する前二篇は、メッセージの透明性を持っていた。

それに対し、「酔いしれた船」の話者と主体は、完全に重なりを見せると同時に、「話者」が、文明を離れ荒々しい自然の力に身をまかせていく「船」であるという以上の外部の文脈からの意味付けは希薄となり、詩は独特の不透明性を抱えていく。そして、「マリアたちの御足」というイメージも、外部の文脈からの特定を困難とする不透明性を持った表象として浮かび上がってくる。これら「船」のもつ不透明性と「マリアたちの御足」の不透明性という二つの不透明性は、翻って、「マリアたちの御足」という表象の意味が、詩の内部的関係においてしか、つまり話者=主体との関係においてしかその本質的意味を特定しがたいことを示している。そして、そのような立場から考察した場合、引用の一節が、「船」の蒙る「波の力」（自然の力）に対しての、超自然的力（宗教的力）の無力と解釈されるのは前述の通りである。

では、当の一節で現れている表現を、仮に表象的キリスト教批判とでも呼べるだろうか。そうではないだろう。なぜなら、ここでの描写は、「マリアたちの御足」の意味を特定する最も重要な要素が、話者=主体との関係である点で、本質的にはキリスト教批判ではなく、自己言及の表現であるからだ。「マリアたちの御足」が無力であるとするならば、それは「船」=詩の「私」との関係においてなのである。だが、それは批判の含意がないことを意味しない。そのように自己へ言及することは、「マリアたちの御足」に対する否定的言及でも確かにあるからだ。したがって、この一節には、批判と自己への内省が分かちがたく結びついている特異な語りの萌芽が見られるのである。

おわりに

以上、阿部の指摘を導きの糸に、ランボーにおけるキリスト教批判を制度的批判と理念的批判という二つの類型にもとづいて、初期韻文詩の二篇、「悪」と「慈愛の修道女たち」を例に確認した。加えて、「酔いしれた船」におけるキリスト教的表象に、その二つの類型には収ま

らない批判の形が現れていることを確認した。

まず、「悪」では、悲惨な戦争の光景と平穏な教会内部という二つの光景の対比を背景に、現実の悲惨に対して、何もしない制度としてのカトリシズムが、様々な人工物に囲まれ金策に夢中な「〈神様〉」の姿を通して、描かれていることを確認した。

次に、「慈愛の修道女たち」では、キリスト教的含意を感じさせるタイトルに対しての詩の主体の異国趣味という対比を背景に、キリスト教文化圏に在るがゆえに、「慈愛」を得ることができない「若者」を介して、「慈愛」という理念のもとに捉えられたキリスト教が批判されていることを確認した。

また、最後に確認したことは、「酔いしれた船」に描かれた、それらに収まらないキリスト教批判であり、性格付けの不明瞭な詩の話者=主体（「船」）と、同じく外部的文脈の不明瞭なキリスト教的表象（「マリアたちの御足」）の対比を背景に、批判と自己言及、つまり自己への内省が分かちがたく結びついていることであった。

そして、これら確認しえたことを通じて分かる、最も重要なことの一つは、これら三つの類型が、表面上の相違にも関わらず、キリスト教を無力な、あるいは不毛なものとして捉える点で明確な連続性があり、一つのテーマの連続として捉えられるということであろう。なぜそれが重要かといえば、当のテーマの一つの生成過程を論じうるとするならば、それはキリスト教批判というテーマについて、後期韻文詩、そして『地獄の一季節』の語りまで、一つの生成過程を論じうる可能性があるということだからである。

だが、それでも、こうした「酔いしれた船」に見られる自己言及と『地獄の一季節』にみられる自己言及の間に、未だ大きな懸隔があるのはすぐに理解されるだろう。なぜなら、両者ともにキリスト教批判を媒介した自己言及であることは同様であっても、「酔いしれた船」の自己への内省が未だポジティブなものに留まるのに対し、『地獄の一季節』における自己への内省は、自身の無力さへの批判を含んだネガティブなものだからである。その点で、このテーマの連続性を論じるにあたって、さらなる転回点があることが予想されるものの、特に「酔いしれた船」の分析を通して明らかとなった、批判と内省の混在という論点は、さらなる展開が期待されるのである。

註

- 1) 「ランボー研究の現在」『ユリイカ』1994年7月号(26巻)、266-282頁。
- 2) Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, édition établie par André Guyaux, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 92. 以下、*Œ.C.*と略記。また邦訳はすべて拙訳である。訳すに際しては、以下の既訳を参考にした。『ランボー詩集』平井啓之・湯浅博雄・中地義和・川那部保明訳、青土社、2006年。『ランボー全詩集』宇佐美斉訳、ちくま文庫、1999年。『ランボー全詩集』鈴木創士訳、河出文庫、2010年。また中地義和『ランボー 精霊と道化のあいだ』青土社、1996年。中地義和『ランボー 自画像の詩学』岩波書店、2005年に一部訳されているものも参考とした。
- 3) *Œ.C.*, p. 92.
- 4) Arthur Rimbaud, *Œuvres complètes*, introduction et notes par Suzanne Bernard, coll. « Classiques Garnier », 1960. Édition revue et corrigée par André Guyaux, 1981. Nouvelle édition revue, 1991, p. 380.
- 5) « Oui, vous êtes heureux, vous. Je vous dis cela, — et qu'il est des misérables qui, femme ou idée, ne trouveront pas la sœur de charité. ». (*Œ.C.*, p. 338).
- 6) 以上の概観の詳細は、『ランボー詩集』平井啓之・湯浅博雄・中地義和・川那部保明訳、青土社、2006年、915頁を参照のこと。
- 7) 「慈愛」についての詳しい説明は、同前の書、915頁。また、ジャック・リヴィエール『ランボオ』山本功・橋本一明訳、人文書院、1954年、220頁の橋本による解説(「ランボオをめぐって」)にも「慈愛」に関しての簡潔な解説がある。
- 8) *Œ.C.*, p. 134. 「慈愛の修道女たち」の訳と解釈に関して、塚島真実「ランボーの自己造形——美しき身体をめぐって——」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、2006年(第15巻)、135-149頁も参考とした。
- 9) 日本語では性別が明示されえないが、仏語原文では「若者」は « Le jeune homme » (直訳では「若い男性」)であり、性別は明確である。
- 10) この詩の主人公というべきこの「若者」は、しばしばランボー自身の自画像だとみなされる。そのような読みが詩の作者と詩の主体を直線で結びつけることになる点には疑問が残るものの、この若者が、最大限に誇張された作者の理想の自画像の一種であることは確かだと思われる。
- 11) この個所の構文理解に関して、著者が知る限り、①「銅の輪」を比喩的に、「若者」の赤銅色の髪のこととする(平井)、②「銅の輪」を直接的描写ととり、「精霊」の修飾とみなす(宇佐美)、③「銅の輪」を直接的描写ととり、「若者」の修飾とみなす(塚島)、という三つの解釈があるが、ここでは③の塚島の解釈に従っている。
- 12) 19世紀フランスにおけるオリエント表象(異国趣味)の実態に関しては、E. W. サイド『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社ライブラリー、1993年。またより簡便には、杉本隆司『『普遍史』とオリエント——ジュール・ミシュレ』『共和国か宗教か、それとも——十九世紀フランスの光と闇』白水社、2015年などを参照のこと。
- 13) *Œ.C.*, p. 134.
- 14) *Œ.C.*, p. 135.
- 15) 註4の版、406頁、註9。
- 16) 同前、406頁、註8。
- 17) 二人の女神は原文では、アレゴリー化されており、人格化への傾斜が明らかである。
- 18) ただし、初期韻文詩と後期韻文詩の架け橋となっているこの1871年前後の詩篇に関して、「愛」と「慈愛」の語の使い分けは、後年の『地獄の一季節』などにおけるほど、自覚的とは思われず、「愛」と「慈愛」は用語として競合しているように推察される。その点で、平井の指摘(『ランボー詩集』平井啓之・湯浅博雄・中地義和・川那部保明訳、青土社、2006年、915頁)は傾聴に値する。
- 19) *Œ.C.*, p. 135.
- 20) ただし、同時期の詩篇「最初の聖体拝受」と合わせて読んだ場合、この批判の内容はより明瞭になりうると思われる。
- 21) *Œ.C.*, p. 162.
- 22) *Ibid.*
- 23) *Ibid.*
- 24) *Ibid.*
- 25) *Ibid.*
- 26) 「酔いしれた船」の基本的解釈については、以下の研究を参照した。中地義和「アニミスム デイナミスム——「酔いしれた船」の修辞」『ランボー 精霊と道化のあいだ』青土社、1996年、19-43頁。
- 27) *Œ.C.*, p. 163.
- 28) Arthur Rimbaud, *Poésies complètes (1870-1872)*, introduction, chronologie, bibliographie, notices et notes par Pierre Brunel, Livre de Poche, coll. « Les Classiques de Poche », 1998, P. 205.

Criticism of Christianity and Reflection in the Works of Rimbaud

Ryo Harada

The criticism of Christianity is well known as a key factor in the works of Arthur Rimbaud (1854-1891), a French poet. But this key factor is not typified enough. The first purpose of this paper is to typify it by two terms: institutional criticism and conceptual criticism, as proposed by Yoshio Abe, a researcher on Baudelaire. In the same proposal, Abe raised the issue that Rimbaud's criticism of Christianity would lead to a problem with the opacity in his poems. The second purpose is to analyze this opacity from the point of view of the criticism of Christianity and the poetic enunciator.

First, I consider the institutional criticism. I use "Le Mal" (1871), one of the early poems (1870-1871), as an example. This poem describes the miserable spectacle of the Franco-Prussian War and the deceit of the Catholic Church. The central point of this description is the cold gaze of God. Rimbaud radically describes God as a physical existence and he criticizes the incompetence of the Catholic Church, namely, the institution.

Secondly, I consider the conceptual criticism. I use "Les Sœurs de Charité" (1871) for this. The "charité" in the title is an object of Rimbaud's criticism, because it is a very traditional concept in Christian culture. The main description of this poem is the incompetence of this concept in our life. Rimbaud criticizes this aspect of Christian culture, denying this key concept.

Finally, this paper enters into the question of opacity and reflection, using "Le Bateau ivre" (1871) as an example. In this poem, the criticism of Christianity remains in the background, but the meanings have an important relation to the poetic enunciator = "Bateau". At this point, the criticism of Christianity has opacity. All in all, it is essentially the reflection about "Bateau".